

全国縦断仕事おこしシンポジウム



コーディネーター

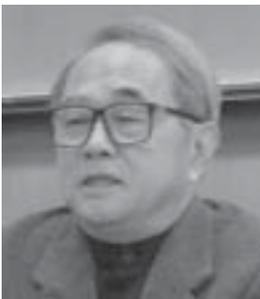
和泉森太さん

(国立函館視力センター)



我妻貞寿さん

(生協法人 北海道高齢協道南地域センターあかね代表)



私は北海道高齢協の道南地域センター

の我妻と申します。今までの高齢者は何かに頼って生きている依存型の高齢者が多かったというのが現状です。しかし年々高齢者は増えていきます。

函館でいいますと、人口の5人に1人から4.8人に1人が65歳以上の高齢者となっています。それから道南地域のある日本海側の市町村では高齢者人口が30パーセントになるところもあります。その高齢者の85パーセントの方々は非常に元気でいらっしやるのです。その元気な高齢者が今までの様に何かに

頼った生き方ではなくて、生きがいのある人生を送ることはできないかということから高齢協の活動を行なっています。人間はどんなに障害や痴呆があっても、生きるということに関する執着は非常に強いと思います。どうしても生きていきたいと思うものです。ではどんな形で生きていったらいいのでしょうか。やっぱりそれは生きがいというものをもった人生ということになります。

娘さんと2人で住んでいる78歳の痴呆のある方のところにヘルパーさんが行っていますが、一番ストレスがたまるのは娘さんです。その娘さんが少しでもストレスがたまらないようにと週3回2、3時間外に連れ出してほしいということでヘルパーが派遣されることになったのです。そのうちその方にだんだんと変化が現れてきました。外から帰ってきたときに、娘さんに必ず自分がどこへ行ってきたのか報告するようになりました。それがしばらくするうちに、今度は自分でメモをするようになりました。その次はヘルパーが来る曜日を認識できるようになり、前の晩から楽しみでそわそわするようになったのです。そして朝になると支度をしてヘルパーが来るのを待っています。そういう状態になるのは結局何なのでしょう。私はそれがその方の生きがいなのだと思います。そして娘さんとの会話も増えて、家庭の中も明るくなったようです。

あかねでは10月からパソコン講座をはじめました。寄付していただける個人の方や団体のおかげで、今14台のパソコンがそろっています。そのパソコン教室で市内の学生さんがボランティアで教えてくれています。パソコンをやることによって楽しみが増え、マ

全国縦断仕事おこしシンポジウム

ンツーマンで教わることで若い人とコミュニケーションをとることができることも好評です。ここでやはり一番良いところは、高齢者の方たちと若い人たちの交流、心の通いです。途中15分間の休憩を挟むのですが、その間に若い学生さんと高齢者がみんなで話をしたりして交流を持つことができます。そのなかで、いかに若い世代と高齢者のお互いの連帯、あるいは高齢者同士、若者同士の連帯を深め、今まで依存型であった高齢者からどんどん活動的に前に出るように促すかということでこのパソコン教室を始めました。このパソコン教室に通っている方たちは生きがいを持って通ってきてくれているのです。このように私たちは高齢者に生きがいを持ってもらえるようにお互いを支え合いながら活動をしております。これからもヘルパーを含めて問題意識をもって一生懸命がんばっていきたいと思いますのでこれからもどうぞよろしくお願いいたします。



佐藤尚子さん

(函館すぷれっと
代表)

函館すぷれっとの佐藤といいます。私たちの団体は「障害の種別を超えて広げよう心のバリアフリー」というスローガンを掲げて、障害者の福祉団体として2年前から活動を行なっています。身体に障害のある方だけではなく、聴覚や視覚に障害のある方のた

めにもバリアフリーを考えていきたいということではじめました。

このあいだ横浜や東京の駅や地下鉄、公共施設の使いやすさ、福祉関係の施設等を見してきました。神戸では阪神大震災の後、ユニバーサルデザインという誰にでもやさしい、わかりやすい、使いやすいデザインのまちづくりを行なっているというので見学してきました。神戸は震災の傷跡がメモリアルという事で残してあって素晴らしいのですが、函館と似ていて坂が多く観光の町なのに、障害者が観光するには不便でシャットアウトされていると感じました。このことを通して、事業として函館の町で障害者が観光したり病院へ行ったりできるようなまちづくりをしていきたいと思いました。しかしすぐに事業としてできなくても、少しずつそれが形になっていけばいいと考えています。

横浜の中華街に行ってきたときに、函館にもそうした中華街があるといいなと思いました。それからサンフランシスコの様に坂道にケーブルカーをつけるといいのではないかと考えています。そこから函館山のロープウェイまでいければ良いのではないかと。しかしロープウェイで登っても、一番上の特等席までエレベーターがついてないのでさらに階段で上らなければなりません。これから函館が障害者にとっても観光しやすい町になるように、まちづくりを行なっていかなければならないと思います。

そうしたまちづくりを行なうにあたって障害者が外に出て働きかけることも重要ですが、なかなか難しいのが現状です。函館もバスができましたが前の日に予約をしなければいけません。横浜の場合では2、3分できて

■ 全国縦断仕事おこしシンポジウム ■

くれて非常に便利でした。このようにもっともっと利用しやすいように改善できるのではないかと思います。障害者の人が函館に来たら宿泊もできて、温泉にも入れて、介護も受けられるようなそうした事業ができればいいと考えています。

そして多くの人にボランティアとして活躍してもらって、誰かのために何か自分のできることをするという生きがいを持ってもらいたいのです。誰かのために自分が役に立っている、というのが生きがいではないかと私は思います。函館を観光地だけではなくて、保養地のまちにしていきたい、活性化していきたいというのが夢です。そして自分達の子も達にとって将来親がいなくても安心して暮らしていけるような函館、また旅行に来てくれる方達に対してもあたたかい函館にしていきたいと活動をしております。



作山すみ子さん

(特定非営利法人福祉サービス協会わかくさ理事長)

ただいまご紹介いただきました、福祉サービス協会わかくさの作山すみ子です。私どもは平成11年にNPO法人を取りましたが、活動は平成元年から行なってきました。みんなで助け合っていくのを目的に設立し、会員組織という事で年間2000円の登録料で資金運営を行なっております。

介護事業として、家事援助は650円、介護

は800円でやっております。以前はボランティアとしてやっておりましたが、去年から介護保険制度ができたので私たちも介護事業に取り組むことになりました。しかし今すごく矛盾を感じております。

発足当初はボランティアとしてやっていたのに、介護保険になってからは事業になりますので金額が決められるようになり、人手も必要になってきました。最初からボランティアとしてやってきてくれた人たちよりも、私どもが開催している2級のヘルパー養成講座から新しく立ち上がった人たち、すぐに介護保険で働きたいという方たちの方が多くなってきています。事務局員を雇うというようになると、ボランティアでやってきた今までとは違ってきちんとお給料を払わなければいけません。毎日月曜日から金曜日まで、9時から5時まで働いて、ある程度のお給料をもらわなければやっていけないという人たちが増えてきました。ある程度質の高いサービスを提供し、運営するためには、きちんとしたお金を払わなければいけないのかと思っていました。

利用者の方に関しましては、私たちは去年から介護保険をはじめたわけですが、新しい分野に飛び込んだのではなくて以前から私たちは介護の活動をしていましたので、そのときから交流の続いていた方たちが介護保険に移行した形です。ですから運営的にはものすごくプラスになっていて、利益は少しずつ出てきています。そういうことで2年が過ぎる来年には、ヘルパーや事務の方に支払うお金をきちんとしなければ今後の運営も難しいのではないかと考えています。雇用関係というのは今のところはっきりしておりません。み

全国縦断仕事おこしシンポジウム

んなパートで行なっています。それは介護保健がスタートしたばかりで本当に運営できるのかという不安があったからですが、来年からはそれも考えたいと思っています。

その他に平成4年から、お年寄りの方たちにお弁当を配食するという事で食事の宅配事業をやっております。週に3回、月、水、金に配送をして、火、木、土にお弁当箱を洗うことにしています。お年よりの1人暮らしで一番困るのは食事の支度ですのでもう少し回数を増やしたいのですが、調理場と洗うところが同じでスペースが限られていますので難しいのです。この調理、洗浄は知的障害者の授産施設を借りて行なっております。ここは私が以前ボランティア活動をしていたところで、わかくさを始める原点といえます。私は以前から障害者の方たちと一緒に何か仕事をしていきたいと思っていました。お互いにできることを助け合って、障害者の方たちとも協働する。そうした私の夢に一步近づいたかなと思います。来年の3月には障害者の方たちがお弁当箱を洗う作業をしてくれて、調理をする私たちと一緒に働くことになっています。賃金もヘルパーと同じように支払うかたちをとり、そして将来的にはお年寄りへの配送もできればいいと考えているところです。お互いにできることを補完しあって相乗効果をあげていくような働き方をしていきたいと思います。

北海道ではNPOと福祉法人がどう繋がるのかということで少し問題になったようですが、私の頭の中では何も問題はないと思っています。こういう新しい試みにもっともっと取り組んでいくことで、雇用の面などでも相乗効果が現れるのではないのでしょうか。



杉田圭夫さん

(コミュニティ放送局「FMいるか」統括ディレクター)

こんにちは、FMいるかの統括ディレクターの杉田です。

今度の12月24日のクリスマスイブでFMいるかは満9年になります。このコミュニティ放送局が函館に誕生してから10年目になるわけですが、FMいるかは日本で初めてできた地域に密着した放送局なのです。函館はこうした放送局のできたすばらしい町です。この町で9年目にして、地域に密着するという使命をほぼ達成できているかなと感じるところです。

こういった放送局というのは、東京や札幌などから電波の飛び出してくる今までの県域放送局や大手新聞による中央からの配信とは違って、自分達の生活している身の回りの必要な情報や話題が日常のコミュニケーションの中で気軽にやり取りできる回覧版的な機能を持っています。高度成長期には効率的、機能的な部分を追及してきましたが、やはりこれからは自分達の住む地域をより良くしたいとか、ここに暮らす人たちをもっと笑顔にしたいとかということに価値観が変わってきた状況の中で、そんな皆さんを応援する媒体としてのまちづくり放送局でありたいと発足しました。私もこの放送局の立上げからずっと関わってきましたが、現在たくさんの人たちに知ってもらうようになって、情報のコミュニケーションがとれているのだなと実感してい

■ 全国縦断仕事おこしシンポジウム ■

ます。

私たちの放送局では様々なイベントを企画します。今までの放送局が行なうイベントというのはどうしてもタレントを呼んだりしての音楽が中心なもので、これはやむを得ないという感じだったのですが、最近では主に、この町に住む人、それからこの町の持っている潜在的な魅力、この町と知らないところでつながりのある町などに注目して何かできないかと智恵を出し合って模索しながら実践しています。

それが、今までこんな魅力があったのか、こんな町とこんなつながりがあったのかということを知ることになりました。そして知ることによって、あらためて何かしらの人的交流や経済的交流が生まれるということにつながるものがわかってきました。私たちFMいるかは、いろいろ試行錯誤しながら少しずつ勉強させて頂いているところであります。私たちは積極的により良いまちづくりを行なっている方達にヒントを頂きながら、またそうした方達は放送局を使っただけで情報伝達だけで済ませたいと思いません。そして私たちの知らないことを発表し、共感できるような放送局でありたいと思っています。

そうした事例の1つとして都市の連携があります。函館というのは空路で様々な都市と結ばれており、観光やビジネスという行き来が行なわれています。東京、大阪とはもちろん、ローカル路線では今度廃止になってしまいますが富山だとか山形とも空路で結ばれています。道内で言えば旭川、釧路、女満別と結ばれておりますが、こうした情報はおそらくほとんどの方がなかなか知りえないもので

す。

これらの都市から観光団が必ず来ます。郷土衣装に身を包み、郷土音楽、郷土料理を持ってやってきて、駅前で、山形の場合、さくらんぼを配ったり市長に表敬訪問したりします。そのときの写真の載った翌日の朝刊を見て、市民の方たちは初めてそのことを知るので、そこで私たちはもっともっとそこにいろんな取り組みができるのではないかと思います。観光団に番組に出してもらうことにしました。そして放送局がお客様を集めて、山形の郷土芸能を披露し、特産品を振舞って下さいということでスペースを提供しイベントを企画しました。これは大変喜ばれ、山形の観光団にとっては山形をアピールする絶好の機会になりますし、市民の側からしてみると今まで紙面でしか知りえなかった情報が山形に実際に行ったかのような体験ができるわけです。こうしたイベントを通して、他の都市の情報を地域の放送局であるFMいるかが地域の中に提供するという事です。

そして次に旅行会社とタイアップして山形に行くさくらんぼツアーを企画することで、他の都市と経済的・人的交流を生み出し相互に潤うような効果を生み出していきたくと努力してきました。しかし私どもの努力が足りなかったのか、山形線が廃止になってしまうのが非常に残念です。

函館という町に視線を落とすと、今までラジオ局やテレビ局がいかに地域に目を向けてこなかったのかと感ずることがたくさんあります。そういったヒントを今後もいろんな方とコミュニケーションを取りながら教えていただいて、放送局を使って皆さんに喜びや笑顔をお届けできたらと思っています。

全国縦断仕事おこしシンポジウム



田中鉄朗さん

(北海道労働者協同組合専務理事)

北海道労協の田中と申します。労協という言葉はあまり馴染みがないと思いますが、ワーカーズコープと同じです。94年に北海道労協は旭川の本部でスタートしました。3つの都市に小さな事業所がある程度でしたので全く目立たない存在でしたが、その後96年ごろから高齢者協同組合づくりを全国に呼びかけはじめ、労協の拠点のない各都市にも大きく広がりはじめました。現在、人口10万都市のうち6都市に地域センターができていまして、10万都市でないところにも2つの地域センターがあります。

高齢者協同組合については先ほど我妻代表からお話がありましたので、私は北海道全体の流れでお話していきたいと思います。私たちはヘルパー講座を介護保険の2、3年前から各地域で開催していきまして、介護保険までに約2000人のヘルパーの修了生を養成しました。その後も引き続き、1年に500人ぐらいの修了生がヘルパーにと育ってきています。しかし修了生のみみんなが高齢協で働くわけではありません。そのうちの何割かの人が高齢協のヘルパーステーションなどに関する状況です。高齢協で現在働いているヘルパーさんの数がおよそ200人になります。函館はこれから本格的な介護保健施設をつくる

うという取り組みをはじめていますが、10の地域でヘルパーさんたちが活動を開始することになっています。

私たち労協というのはもともと福祉の組合ではなく、雇用失業の問題と向き合って闘ってきた労働組合の運動から始まっています。そうした運動から今は事業団として、あるいは地域の労協の運動に発展してきたわけです。私たちの仕事のほとんどは、公共の道路の掃除、公園の清掃、ビルのメンテナンス、病院や福祉施設の様々なサービス業務を委託で請け負っていました。

高齢協の設立を推進する中で、今変わってきているのは福祉の分野で働く担い手が増えてきたということです。北海道で200人のヘルパーさんが高齢協と一緒に活動することになったということは本当にすごいことです。パートや登録という形も多いですけども、働く場をつくっていることには変わりはありません。この北海道でヘルパーの仕事が始まるようになって、自分達の仕事のあり様に対するいくつかの変化が生まれてきました。

委託のときの契約の相手は役所や病院のオーナー、福祉法人であったりと団体を通じて仕事を受けますから、なかなか「地域」を実感するという点では薄いところがあります。しかしヘルパーの仕事が始まって、明確に地域ということや1人1人の利用者さんの生活の場に立ち会うことを考えるようになったことが1つの大きな変化です。

旭川の事業所では市からの仕事で夕食の宅配をやっておりますが、次の日に行くと利用者さんがきれいに食器を洗って待っています。それは話をしたくて待っているのですね。1人でお住まいの方が多いですから、前

■ 全国縦断仕事おこしシンポジウム ■

のようにいろいろな家の中のことなどできないのですが、それを宅配に行った人がその場では解決できません。このように地域の生活の中で様々なやって欲しいことがたくさんあることをみるのです。そういう目で見ると、これまでやってきた清掃の仕事や委託を受けてやってきた調理の仕事の延長に、もっと地域1人1人の生活の中に関った様々なことがあり、それが仕事づくりになっていくのだと気が付きました。そしてそれが地域を見るということになってきたのです。

労協は働く協同組合ですから、みんなが出資してみんなで管理、運営をして、そしてみんなで働くという形態をとっています。そういう方法は考え方、理念で言えばそれぞれが経営者だとも言えなくもないわけですが、委託の仕事の中で毎日安定的に働き給料が計算されて支払われるような生活がずっと続くと、いつのまにか雇われて働いているのと代わらなくなってしまうこともあるのです。しかしヘルパーさんたちは最初ワーカーズコープをつくったときに、自分達を知ってもらうために必死で地域を回って仕事を確保してきました。このような自ら仕事おこしをし、経営を成り立たせていくという協同組合の姿を隣で見ることによって、それが私たちの組織をもう1度見直す機会につながってきた気がします。

最近医療機関や福祉法人の仕事が多かったのですが、今全体的に経営が大変で労働組合に55歳定年制を提案しなければいけないような状況らしいのです。そうすると提携しているわれわれも一緒にその問題について考えなければなりません。そうしたことから、やっぱりそこに求められる医療や福祉、保

健、身の回りの生活全般にしっかり目を向けて、力を合わせてまちづくりや仕事おこしをやっていかなければならない時代に入っているのだと実感しています。

最後に函館でこのような市民発のまちづくり仕事おこしの集会を開いていただいたことに大変感動を覚えています。最初の打ち合わせの時には、ちょうど道南NPO市民会議という会議があったので参加しました。そのなかでNPOのこれからのテーマということで1つは使命、ミッションということ、2つ目に地域の需要、高齢社会、3つ目に雇用機会になり得るかという問題を取り上げており、3つ目の雇用機会に関するところが非常に印象的でした。ボランティアだって地域に必要なニーズを継続して実現していくということは、それはやっぱり仕事おこしではないでしょうか。そういう点でわれわれもワーカーズコープ法の制定を目指していきたいと思うのですが、そのためにもNPOとの連携を地域で広めていく必要があります。函館の今日の集会を皮切りに、私たちとしては来春に向けて旭川、釧路、札幌という順に市民シンポを開いていけるように地元に戻ってがんばっていきたいと思います。